町長ひとりごと ⑥⑧

斉藤 譲

最近、岩切卓士という若い写真家が、「笠智衆」の写真集を発刊した。はて、笠智衆とは何者かと思われる人も多いと思うが、あの映画「フーテンの寅さん」に帝釈天の御前様役で出演し、枯淡で絶妙な演技をみせるあの老優だといえば、誰しもがああ、あの人のことかと思いあたるに違いない。世に、名優と呼ばれる人は多いが、彼ほど清廉で、心の温もりを感じさせる俳優を、私は他に知らない。彼は、私の最も好きな俳優である。

雑誌の新刊案内で、この写真集のことを知り、私は直様近くの書店で取り寄せていただいた。手元に届いた写真集は、かなりの大判であるが、装訂は表紙に枯れたすばらしい筆跡で、俳優・笠智衆と書かれただけの、極めてスッキリしたもので、それがまたいかにも彼に相応しいと思った。

▼表紙を開けたとたんに、暗闇の中で瞑想する彼の顔が、目に飛びこんできた。一瞬、私はその姿が、仏像のように見えた。それほど彼の顔には、凛とした気高さと澄みわたった静けさが漂っていた。また、幾筋もの深い皺は、端正な顔立ちに一層の深みと存在感を与えている。人間を超越した仏の顔だ。私はこの一枚の写真に手足を縛られ、身動きができないほどの衝撃と感動を受けた。

彼は、一九〇四年（明治三十七年）生まれということであるから、現在八十八歳の高齢になっている。熊本県の出身で、東洋大学印度哲学科を卒業後、松竹映画に入り、俳優生活六十六年の間に出演した映画は、三百本以上だという。特に、小津安二郎監督の映画には、ほとんど出演し、「晩秋」や「東京物語」は、彼の代表作である。

名優

この写真集に収められている彼の写真は、どれも最近のもので、いかなるポーズの中にも、老いが色濃く影を落としている。しかし、そこには「老いの美しさ」が輝いているばかりで、「老いの醜さ」などは、一点として存在しない。私もこのように老いることができたら何と素適なことであろうかと思ったが、この写真集の巻末に、山田洋次監督が、「笠さんを讃える」と題するメッセージを書いているのを読んで、それはとても叶わぬ夢だと思い知らされた。

▼笠さんの顔は美しい。いくら見ていても見飽きない。見ているうちに、しみじみとした隠やかな気分になってくる。そして、ああこんな日本人もいるんだ、悪人ばかりじゃないんだと思うと何だか幸になって、気がつくと自分も笑顔になっている。美しい陶器を眺めていると、つい笑顔になることがあるが、笠さんの顔と姿は、国宝級の焼物にも似て、そのままでもう芸術品なみである。だから、笠さんは何もしなくていい。ただカメラの前に座って下さればもう画になってしまう。寅さんシリーズ四十四作の全てに笠さんは帝釈天の御前様役で出演しているが、ぼくは例えワンカットでもいい、笠さんが映っているだけで、ぼくの映画は値打ちが上るのだと思っている。ただもうそのままカメラの前にいて下されば、いいと監督が思っているからといって、笠さんは何も考えずに撮映所に現れるのではない。実は、何日も前から笠さんは、毎晩、毎晩自分のセリフを口に出して稽古するのである。そんなに沢山セリフがあるわけではないのに、笠さんは懸命に練習する。

▼十七年前、ぼくは瀬戸内海で「帰郷」という作品を撮影した。笠さんは、井川比佐志、倍賞千恵子夫妻の父親役で出演してもらったが、狭い民宿の一室で、笠さんが隣合せで泊っていたとき、ぼくはそのことを知りました。夜遅くまで、笠さんは翌日のセリフを独りでくり返し、しゃべっているのである。長いセリフではない。「今日も暑いね」とか「気をつけて行けよ」とかいった程度のほんとうに簡単なセリフなのだ。それを酒も煙草もたしなまない笠さんは、夕食後から就寝までの時間をただひたすらくり返し、くり返し稽古されるのだ。「東京物語」や「麦秋」などのあの名優の、ひたむきなセリフの稽古の声を壁ごしに聞きながら、ぼくは思わず正座したものだ。

▼真の名優は、決して見せ掛けの努力や、気まぐれな商業主義の徒花の中からは生まれはしない。

「老いの美しさ」も、また然りである。人間誰しも、人生の名優になりたいと願っている。それを叶える道は、邪な心を捨て、ひたすら目標に向かって、努力をする以外にはなさそうである。